

天皇杯・農林水産大臣賞受賞

地域課題を農業で解決！老若男女・農も福祉も、地域一丸 「百姓百品」

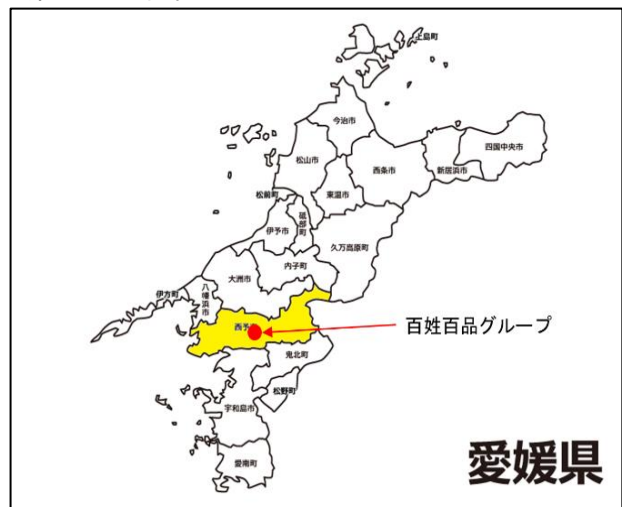
ひゃくしょうひゃっぴん
受賞者 **百姓百品グループ**
(愛媛県西予市野村町)

■ 地域の沿革と概要

西予市は、愛媛県の南西に位置し、平成16年4月、旧東宇和郡（明浜町、宇和町、野村町、城川町）と旧西宇和郡三瓶町が合併して誕生した。面積は514k㎡（東西距離約49km、南北距離約24km）、人口は35,100人（令和5年2月現在）である。当市の最大の特徴は、標高差1,400mを舞台とした多彩な自然環境であり、東はカルスト台地の高知県境の山々と接し、西はリアス海岸の宇和海に臨む。

平成25年に「四国西予ジオパーク」として日本ジオパークの認定を受けたことにより、海拔0mから標高1,400mの標高差のなかで、貴重な地質や地形、歴史、文化、生態系等、数多くの地域資源を活かした地域活性化の取組みが実施されている。

第1図 位置図



■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

西予市野村地区は、市東部の中山間地域で、地区全体が四国山脈に囲まれており、四国カルストを源とする豊かな水と土壌に恵まれた自然の多様性に富んだ地域であるが、近年高齢化や人口減少が進み、耕作放棄地が増加している。

基幹産業は農林業で、戦後間もない頃には養蚕や酪農(乳用牛)で栄え、「ミルクとシルクの町」と自称してきた。

第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	旧町単位の集団等
地区の性格	機能的な集団
人口等	総人口 7,160人 総世帯数 3,586戸
農業経営対数 (内訳)	農業経営体数 619経営体 個人経営体数 600経営体 団体経営体数 19経営体 (内、法人経営対数) 10経営体
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 18,786ha 耕地面積 729ha 田 331ha 畑 398ha 耕地率 3.9% 一経営体当たり耕地面積 1.2ha

養蚕については安価な外国産生糸の攻勢により次第に衰退したが、酪農については今も県全体の約半分を占め、1位のシェアを誇っている。耕種部門については、きゅうり、かぼちゃ、ゆずが主要作物である。



写真1 野村地区

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

深刻化する地域の高齢化、人口流出に対する全国的な村おこしの流れの中、野村地区（旧野村町）で「村おこし部会」が結成された。当時、町役場の職員で村おこしの担当であった現会長の和氣數男氏が、先進地視察で訪れた住宅街に野菜を持って行き販売している優良事例を参考に、「これは、面白い！村おこしといえば文化活動もあるが、長続きさせるためには経済を伴う活動がいい」と思い立ち、平成4年に野村町内の農協で販売を開始。農産物が飛ぶように売れたため、徐々に野村町から松山市へ販売網を広げ、販売場所を確保・拡大していった。和氣氏は、直売活動に専念するため平成10年に退職し、地域の農家140人で「百姓百品産直組合」を立ち上げた。平成18年、新たに生産者を株主とする「百姓百品株式会社」（以下「百姓百品」という。）として法人化し、弁当や加工品等、農家以外の出荷者も活動に加え、地元住民一体となって、地域産物の利活用を推進していくことができるようにした。

平成20年には、地域の高齢化や担い手不足が原因で、「年々増える耕作放棄地をどうにかしてほしい」という相談の声が地域から寄せられたことから、農業生産法人「株式会社百姓百品村」（以下「百姓百品村」という。）を立ち上げ、地域の高齢者等から借り受けた耕作放棄地で青ネギの周年栽培を行い、業務用として毎日全国へ向けて販売を行う事業を開始した。

平成25年には、就労継続支援B型事業所「株式会社野村福祉園」（レインボーアグリ）（以下「野村福祉園」という。）を立ち上げ、出荷作業を手伝う農福連携事業を開始した。このとき、「地域の課題を“農業”で解決する」をミッションとし3つの法人が連携する現在のグループの体制が整った。



写真2 百姓百品本店直売所



写真3 青ネギ栽培



写真4 野村福祉による出荷作業

(2) むらづくりの推進体制

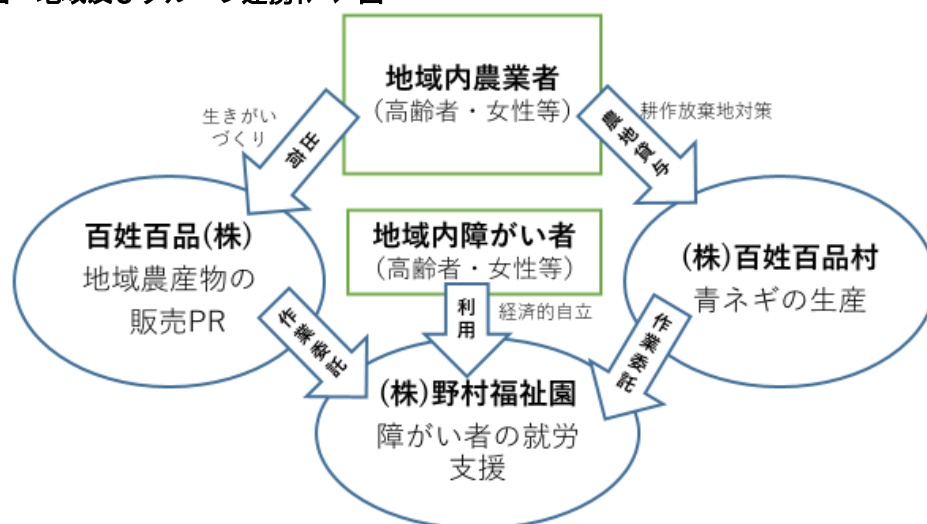
百姓百品グループは、農産物直売所である「百姓百品」、青ネギ専門の農業生産法人である「百姓百品村」、就労継続支援B型作業所である「野村福祉園」の3つの組織から成り立っており、西予市野村地区を拠点にして「地域の課題を農業で解決する」をミッションに、3社が連携して事業に取り組んでいる。

第2図 むらづくり推進体制図



それぞれの主な目的は、百姓百品が「地域の高齢者生きがいくつくりと地域農産物のPR」、百姓百品村が「青ネギの栽培による地域の耕作放棄地対策」、そして野村福祉園が「農業の担い手確保と障がい者の経済的自立への支援」であり、それぞれ地域住民が主体的に関わり合い運営に参加している。

第3図 地域及びグループ連携イメージ図



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

百姓百品グループは、高齢化が進む中「なんとか地域に活力を」と、開始した農産物直売所がスタートである。

その後、産直活動の拡充に加え、地域が抱える耕作放棄地の増加に対して、遊休農地

を借り受け再生しての青ネギ栽培、担い手不足に対して農福連携事業の開始等、「地域の課題を“農業”で解決する」をミッションに、地域の課題に向き合いその課題を持続可能な事業として位置づけ体系化していった。

第4図 百姓百品のビジネスイメージ —社会課題や社会構造の変化を起点に、新領域ビジネスを創造— 地域の課題を“農業”で解決する



そして現在、グループの活動は、地域全体で取り組む「ソーシャルビジネス」として展開しており、地域に点在する課題の大きな受け皿としてなくてはならない組織に成長している。

2. 農業生産面における特徴

(1) 零細農家の受け皿としての産直市

高齢化が進み、規模縮小する農家が多くなる中、百姓百品は零細農家の販売面における貴重な受け皿となっている。また、農協の出荷が中心の農家にとっても百姓百品での収入は補完的な役割を果たしており、安定収入の確保等地域に果たしている役割は大きい。松山市で産直市を始めた当初から口コミによって人気を博し、平成7年に産直市近くの地産地消の安全安心な農産物を求めるコープ東本店からインショップ販売の提案を受け販売を開始、人気を得たことから、現在では、松山市内4店舗、西予市市内2店舗に拡大し安定した販売実績を得ている。



写真5 松山市内インショップ

現在、野村地区を中心に西予市市内の農家等437人が出荷しており、百姓百品が4tトラックで野村地区内5カ所毎朝6時に集荷し各店舗に配送、販売している。

また、出荷者は株主となり、初年度に出資金と入会金、年会費を支払うことで自分が選んだ店舗に農産物等を出荷でき、「あなたの野菜がほしい」という固定客を持った生産者も多く、自ら考え判断し出荷先を決めることでやりがいの向上につながるとともに、株主という立場で、総会等で運営に意見をすることができる。

このほか、百姓百品は、零細農家が産直市を一層活用できるように、各地区で座談会

を実施し、話し合いの機会や生産者同士の栽培方法や販売方法についての情報交換の機会等も数多く設けている。

(2) 耕作放棄地対策としての青ネギ栽培

地域で増加する耕作放棄地への対策として、百姓百品は、「自分の野菜が売れなくなる」と懸念している小規模農家との競合を避けるため、地域であまり栽培されていない作物を導入することとした。導入作物の検討に当たっては、地元野村高校の卒業生を数名雇い、若手職員で試行錯誤を繰り返し、昼夜の寒暖差があり冬の降雪が少ない野村地区において、良品質の作物が収穫でき通年栽培が可能な青ネギを導入することとした。

現在、青ネギほ場は町内に 200 か所にあり、15ha 全てが地域の高齢者等から借り受けたものである。育苗はハウス、本圃は露地のみで、冬はトンネル栽培を行い、年 3 ～ 4 作栽培している。



写真6 耕作放棄地を再生した百姓百品村の青ネギほ場

加えて、安定出荷を確立するために、9 戸のネギ栽培農家と全量買い取りの委託契約を結んでおり、この栽培面積は 2.5ha である。

生産された青ネギは、「雲海の山里で育った地域 みんなを元気にするネギ」「朝霧ネギ」として、スーパーや飲食店、カット工場向けに販売しており、県内のうどんチェーン店を中心に 30 社と契約取引を行っている。首都圏等へ出向いて地道な商談を行ってきた結果、外食産業や加工業者を中心に契約先は年々全国に拡大している。

(3) 担い手への農地集積

販路拡大に伴う青ネギ生産量の確保と地域の農業の維持・発展のため、野村地区の太田・権現エリアで実施している農地中間管理機構関連農地整備事業の基盤整備において、地域の中心的な経営体に位置付けられている百姓百品村が、農家懇談会や生産出荷対策会議で協議を重ね、2.7ha の農地を担い手に集積する予定となっている。

(4) 担い手育成対策に貢献

百姓百品では、社員の平均年齢は 27 歳と若く活気があり、社会経験を補うため、社内研修など数多くの機会を積極的に設けている。それとともに、周年安定生産を目指し労働力削減効果が期待できる生育・収穫予測システムの開発・普及等 IT の活用を

積極的に行い、働きやすい環境づくりに努めている。

また、農業大学校卒業生も積極的に受け入れており、社内で栽培技術の習得や経験を積んだ後、百姓百品村の契約農家として独立する道も用意している。グループとして栽培技術、経営面でのサポートを継続して行うことで、将来、地域の中心的な経営体に成長することを期待している。



写真7 専門家を招いての研修会

(5) 農福連携による新たな担い手の確保

百姓百品村の社員7人で青ネギの栽培管理を行っているが、育苗と出荷調製作業は、同グループの野村福祉園に作業委託している。野村福祉園では野村地区内外の障がい者40人が働いており、百姓百品村の青ネギ栽培と出荷調製作業の8割を請け負っており、農家の高齢化が進む中、地域農業の新たな中心的な担い手として大活躍している。農産物の出荷には、必要不可欠な担い手として地域の期待が大きい。



写真8 野村福祉園利用者による作業

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 交流の拠点となっている産直市

松山市のコープの店舗では、百姓百品が雇った西予市出身の専従パート職員が、手作りレシピの掲示や工夫を凝らしたPOPにより、販売スペースをより魅力的なものとするに加え、消費者と積極的なコミュニケーションをとっている。このことにより、地元の農産物や加工品の情報を発信する役割を担い、地域経済の活性化やPRに貢献している。



写真9 工夫を凝らした売り場

(2) 高齢者の生きがい対策、食文化の伝承としての産直市

百姓百品の出荷者は、高齢者が多く平均年齢70歳を超えているが、「お客さんが待ちよるけん、休むわけにはいかん」と元気に活躍しており、地域農業の維持・活性化に留まらず、高齢農家の健康づくりや生きがいづくりにも大きく寄与している。

また、地元を整備された加工施設を利用したり、自ら起業し加工場を整備して手作り加工品を販売したりする女性農業者等も次々と誕生し、これまで培ってきた伝統を活かし、生き生きと活動する女性たちが増えてきた。



写真10 百姓百品の出荷者作業

彼女たちが商品として販売する加工品は、寿司や巻きようかん、しば餅等地域に伝わる郷土料理が中心で、地元を離れた人にも「懐かしいふるさとの味」として人気を博しており、食文化の伝承・PRにもつながっている。



写真 11 郷土料理等の加工品

(3) 障がい者の自立と理解促進

野村福祉園利用者は、軽作業・選果・農作業・清掃・調理・店舗業務等の幅広い作業の中から自分に合った作業を選ぶことが出来る。

障がい者にとって、自分の労働で安定した所得を得ることは大きな喜びであり、経済的精神的自立に大いに貢献している。

このようなグループ内連携活動は障がい者の自立モデルとして、取材や情報誌等に取り上げられることも多く地区内外の事業所からも注目されている。

(4) 女性が働きやすい環境づくり

グループの運営については、男女共同参画についての意識が高く、百姓百品の株主の60%は女性で、方針決定の場に男女が同等の立場で参画でき、組織運営に女性の声が十分反映されるなど、ジェンダー平等が実現できている。加えて、令和4年に百姓百品、令和5年には野村福祉園のそれぞれの代表取締役役に30代の女性が就任し、グループを支える女性が十分活躍できるよう、仕事と育児の両立ができる職場環境の整備にも力を入れており、子育て世代が気兼ねなく休める体制等が整っている。

(5) 環境保全と環境負荷軽減への取り組み

百姓百品村は、耕作放棄地を積極的に引き受け、ほ場や周辺の除草作業等を行い地域の農地の維持に努めることで景観を保全し環境保全に貢献している。

また、畜産農家が製造する環境に配慮した牛ふん堆肥をネギ栽培ほ場で使用するなど、畜産業と連携し、地域資源を循環させることで環境負荷軽減に取り組んでいる。

(6) 百姓百品は災害復興のシンボル

百姓百品は、創設当初から農家と非農家が一体となって活動を展開していることから、地域住民の高い信頼を得ており、町の中心にある本店が西日本豪雨で被災した際、短期間で活動を再開していく様子が、復興のシンボルとして、地域住民を勇気づけた。

復旧した新店舗は、販売だけではなく休憩も可能なイートインスペースを設けるなど、住民に開放された交流拠点となっており、災害復旧に留まらず、地域コミュニティの活性化に寄与する新たな活動に積極的に取り組んでいる。